

日本語・日本語 教育を研究する

第24回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは「新しい「日本語教育文法」の構築をめざして」です。

新しい「日本語教育文法」の構築をめざして



北海道大学留学生センター助教授 小林 ミナ

1. 「教育文法」とは

「教育文法 (pedagogical/pedagogic grammar)」とは、文字通り、「教育 (pedagogy) のための文法」のことをいいます。「教育のための文法」というと、「言語学での成果を、わかりやすく噛み砕いた文法説明」とか「効果的な教室活動」といったような、「教え方」の観点から、とらえられがちです。しかし、決してそうではありません。「教育文法」というのは、「どのような形式を単位に、シラバスを組み立てるのか」とか「どのように用法を分類するのか」といったような、「教える内容」の視点から、文法をとらえ、記述していく立場をいいます。

「外国語を学ぶ」というのは、とても複雑な営みです。ですから、それを支えるべき「教育文法」も、いくつかの異なる側面をもっています。ここでは、それらを具体的にみていくことで、新しい「日本語教育文法」を考えていく手がかりを、示していきたいと思えます。

(1) 「記述文法 (descriptive grammar)」の観点から

「記述文法」というのは、「言語のありのままの使われたかたを記述する」という立場です。現実のコミュニケーションに役立つ日本語を教えるには、ことばが実際に、どのように使われているかを、知らなければなりません。

たとえば、日本語では、次のように、助詞を使わないことが、しばしばあります (φが、その箇所です)。

a) 「のどφかわいたね」「そうだね」

b) 「ねえ、ハンカチφある?」「ごめん、ない」

助詞がなくても、きちんと意味は伝わりますし、そのほうが、かえって自然に聞こえます。しかし、c) の例は不自然です。

c) 「傘は?」「あっ、バスφ忘れてきちゃった」
(に)

また、書きことばやあらたまったスピーチでは、助詞がないd) のような文を、使うことはできません。

d) この発表φ日本の税制問題φとりあげる。

このことから、助詞が省略されるのは、「くだけた

話しことばにおいてであること」、さらに、「何でも勝手に省略できるのではなく、ある一定の規則にしたがって、省略されること」がわかります。会話授業のための「教育文法」では、助詞の省略に関する「ある一定の規則」が、体系的に記述されなければいけません。

このほか、「記述文法」の観点から、興味深い事象としては、「コロケーション (collocation)」や「頻度 (frequency)」といったものがあります。「コロケーション」というのは、「いっしょに使われることの多い語の連鎖」をいいます。たとえば、日本語では、e) の言い方は不自然で、f) のように言わなければなりません。

e) ×経済の能力が使える仕事をしたいと思っています。

f) ○経済学の知識が使える仕事をしたいと思っています。

つまり、日本語では「経済の能力」は、「コロケーションを成さない」といえます。このような「コロケーション」に関する情報は、「語彙、文法面での日本語らしさ」につながります。

「頻度」についていえば、日本語では、丁寧体の動詞否定形に、「食べません」と「食べないです」の2つの形があります。ほとんどの日本語教科書では、「食べません」だけが提示され、教室では、「食べますか」「いいえ、食べません」といったドリル練習が、おこなわれています。しかし、実際の日常会話のデータを、大量に分析してみると、約70%が「～ないです」の形であり、「～ません」の用例は、約30%であることがわかりました。そうであれば、会話授業では、初級の段階から「～ないです」を導入し、練習したほうが良いといえます。このような「頻度」からの考察は、「教えるべき文法項目を選び出す手がかり」になります。

(2) 「規範文法 (prescriptive grammar)」の観点から

「規範文法」というのは、「言語の正しい使い方を記述する」という立場です。一段動詞 (ru-verb) の可能形 (食べられる、見られる) には、いわゆる「ら抜きことば」といわれる、「食べれる、見れる」という

形が、しばしばみられます。しかし、「ら抜きことば」は、日本語母語話者の間でも、「完全に正しい形である」とは、まだ認められていません。したがって、「よく使われている」というだけの理由で、『食べられる、見られる』ではなく、『食べれる、見れる』を優先的に教えたほうが良い」というのは、「規範文法」の観点からは、好ましくないといえます。

一般的には、「音声言語」よりも「文字言語」のほうが、より高い規範性が求められます。

(3) 「言語習得研究」との関わり

習得研究の分野では、「結果の状態をあらわすテイル（棚にたくさん本が並んでいる）より、動作の進行をあらわすテイル（いま、本を読んでいる）のほうが、早く習得される」といったような、「習得順序」についての研究結果が報告されています。

また、「レベルがあがるにつれて自然に減っていく誤用」と「上のレベルになってもなかなか消えない誤用」の違いなどについても、研究がなされています。日本語を学ぶ主体である、学習者の頭のなかで何が起きているのかを知ること、学習者にとって、習得が容易な文法項目とそうでない項目を知ることが、「教える順序＝シラバスの配列」を考える手がかりとなります。

2. 日本語教育における文法教育の現状

(1) コミュニカティブ・アプローチと文法シラバス

1980年代に提唱されたコミュニカティブ・アプローチは、日本語の教科書にも大きな影響を与えました。言語の「構造」ではなく、「機能」や「概念」に注目した「概念・機能シラバス」が採用されるようになったのも、その一つです。

g) は「文法構造シラバス」、h) は「概念・機能シラバス」の教科書からの抜粋です。

g) 「あなたは日本へ行って、何をしますつもりですか。」
「わたしは日本へ行って、大学に入るつもりです。」
(『日本語初歩』、p151)

h) 「あ、そう。じゃ、(お子さんに) 会いたいですよね。」
「ええ。試験が終わったら、国へ帰るつもりなんですけど。」
「ああ、そうですか。」

(『Situational Functional Japanese Volume2: Notes』 p57)

どちらも、意志をあらわす表現の一つである「～つもり(です)」を教えるための会話ですが、h) のほうが、ずっと自然に感じられます。g) のように、「～つもりですか。」という問いかけを、ふつうのコミュニケーションで使うと、たいへん失礼になりますし、「相づち」も「応答詞」もない会話は、実際にはありえないからです。

(2) いまあらためて「初級文型」の見直しを

上にあげた、h) のやりとりは、g) と比べると、たしかにずっと自然です。ところが、実際の日常会話デー

タをみても、日本語母語話者は意志をあらわすときに、「～つもり(です)」という形式を用いることは、ほとんどなく、「(よ) うと思う」のほうが、圧倒的に多いことがわかりました。

ここからいえるのは、「相づち」や「応答詞」を入れることによって、自然さを出すこと以前に、「～つもり(です)」を教えるかどうかについて、あらためて、考え直すことが必要だということです。

3. 新しい「日本語教育文法」のために

(1) コミュニケーションのための文法

「行きませんか」「はい、行きません」という問答だけではなく、「行きませんか」「ええ、いいですね」といったような、自然な会話がおこなえるようになるためには、「相づち」、「応答詞」、「縮約形」などの、「会話の自然さを支える要素」も取り入れなければなりません。「話の切り出しかた」、「依頼の談話の進めかた」といったような、「談話の展開に関わる要素」も必要になります。このように、コミュニケーションのためには、より広い範囲で文法をとらえ、教える内容を拾い上げていくことが必要です。

(2) 技能別の文法

1. (2) で書いた「ら抜きことば」を、学習者自身が話せるようになることは、それほど必要ではありません。しかし、「見れる」を音として聞きとり、「見られる」と同じ意味だと理解できることは、たいへん重要です。

このように、新しい「日本語教育文法」では、技能ごとに必要な文法を考えます。すべての文法項目が「読めて話せて聞けて書ける」ようになることを、求めるのではなく、四技能、もっと具体的には、学習者が日本語を使っておこないたい言語活動に即して、文法を見直していこうと考えていきます。

「必要な日本語を効率よく学ぶ」という学習者の視点からみたとき、これまで教えようとしてきた文法は、本当に必要なものばかりだったのでしょうか。学習者がおこないたい言語活動が何かを知っているのは、一人一人の現場の教師です。「x と y と z … を教えるのが初級文法」という既成概念を捨て、もっと自由な発想で、文法を見直してみることが、いま、求められています。

基本的な参考文献

- 小林ミナ (2002) 日本語教育のための教育文法『日本語文法』2巻1号、153-170.
- 野田尚史編 (2004予定) 『新しい日本語教育文法』、くろしお出版
- Odlin, T. ed. (1994) *Perspectives on pedagogical grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.